

近代日本語における外国地名の漢字表記

——明治・大正期の新聞を資料として——

山 本 彩 加

0. はじめに

現在、外来語は片仮名で表記するのが一般的であるが、室町末期から明治期にかけては漢字表記されることも多かった。また、一つの単語でも数種類の表記を持っているものが多く見られる。

本稿では、明治・大正期に刊行された新聞を用いて「外国地名の漢字表記」を通時的に見ていきたい。外来語の中でも外国地名を選んだのは、一般名詞や人名よりもあらゆるジャンル・年代の資料に安定して現れると予想され、漢字表記の長期にわたる変遷を調べるのに適していると考えたからである。

従来、複数の地名の漢字表記を通時的に調査した研究はほとんど見られない。そこで、今回、有名無名あるいは使用頻度の多少にかかわらず、あらゆる外国地名を採集し、漢字表記の現れ方やその表記法、また使用される漢字がどのように遷移していくかを調査して検討を加えたい。さらには、当時の人々の外国地名漢字表記に対する認知度や漢字選択における意識をも明らかにしていきたい。

1. 先行研究の概要および問題点

国立国語研究所（1987）は、『中央公論』における外来語（外国地名を含む）の仮名／漢字表記に関する研究で、1906年から1976年まで10年ごとに調査をしたものである。外来語全体が年々増え続けていく中で、1926年を境に漢字表記優勢からカナ表記優勢になることを指摘した。深澤（2003a）と井出（2005）はともに、『太陽』における外国地名の表記選択について論じている。深澤は、『太陽』でも1926年にカナ表記優勢になると指摘したほか、文体差に着目し、文語文体より口語文体が片仮名表記に対する「受け入れやすさ」があると論じた。一方、井出は、文体差はあまり関係がなく、文章のジャンルや著者の生年が表記選択と相関していると述べた。ただ、これらの研究は漢字表記に主眼を置いたものではないため、漢字選択についての考察は見られない。国立国語研究所（前掲）は調査

範囲が長いが、考察そのものが少なく、深澤（前掲）・井出（前掲）は個々の地名に関する考察を欠く。また、『太陽』の刊行期間が1895～1928年であるため、漢字表記が盛んであった明治時代前半の実情を知ることができない。

漢字表記に主眼を置いた研究は、音訳に関するものと意識に関するものとに分かれるが、音訳に関するものが大部分を占める。通時的なものでは、王（1992a～1996）の一連の研究が、個別国名や一部略称について中国側資料との関連も含め深く考察している。しかし、個々の調査が綿密であるだけに、国名・地名表記全体の傾向を述べるには至っていない。広く国名・地名を調査したものに佐伯（1986a）、西浦（1971）があるが、両研究とも調査範囲が1860～70年代初期の新聞が中心である。よって漢字表記が安定していく1870年代半ばから、漢字表記が衰退していく1920年代半ばまでの重要な期間を展望することはできない。さらに、記述が登場数の多い国名や一部の地名に限られることや、当時の中国語表記との関連が述べられていない、といった問題点もある。その他の研究もごく限られた年代に限られたものばかりである。金（1999）は、近代の日・中・韓資料をそれぞれ5種ずつ調査しているが、調査資料の依拠文献が明記されていない、調査結果の報告が主であり考察がなされていない、といった問題がある。

意識表記については、音訳表記より全体数が少ないこともあり研究が少ないが、個々の地名について深く考察されており、参考となる。

以下、上記の中から、漢字選択の意識に関する考察がある①西浦（1971）、②佐伯（1986a）、③王（1992a）の概要をまとめておく。

①西浦（1971）…「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称呼・表記について」

主題：慶応新聞グループを中心とした新聞群における外国名称呼・表記の実態。

※「慶応新聞」とは慶応から明治の改元前に大体発行された新聞群のこと。

調査対象：①1862～1870年の新聞20種（欧字の翻訳新聞、日本での外字新聞、外国人による邦字新聞、日本人の創意による邦字新聞、外国人主宰・邦人編集の新聞に分類）。

②漢字・仮名表記された外国地名（国名が中心）。振り仮名をも含む。

着眼点：新聞の性格・新聞種別から見た称呼・表記の現れ方。国名称呼・表記（ヨーロッパ・アフリカ・オセアニア・アジアから約30国名）の変遷。主に近世地理書・地図からの流れ。

結論：①記事の信頼性・選択性より速報性を重視した結果、外国名の称呼・表記は整理意識に欠け、不統一・混用を免れなかった。

②仮名表記使用が、ほとんど漢字表記に匹敵する程増加した。

③従来の画数の多い漢訳名が整理・選択されて、使用度の高いものに絞られた。

④近世地理書・地図その他の表記と異なる、新しい表記のいくつかを創始・採用した。

⑤記事文の種類による表記種別が見られる。

⑥新聞の種類により、主宰・編集者・翻訳者の方針・教養などが個性的な表記化

に反映している。

②佐伯（1986a）…「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」

主題：明治維新前後の漢字表記の揺れ（共時的変）と交替（通時的変）との様相。

調査対象：①1861～1872年の新聞30種。

②漢字・カタカナ表記された外国地名。振り仮名をも含む。

着眼点：表記の揺れと交替の観点から、1紙1種・1紙多種・多紙1種・多紙多種の地名に分類し、表記の現れ方に差異はあるか。特に多紙多種の場合、どのように変遷するか。

結論：①初期（1861～62年）しか現れない漢字表記がある。頻用されそうにない地名にまで漢字を捜し出してあてる行きすぎを冒したか。

②漢字表記推移の意識（①～③が意味に関わり、④⑤が形態に関わる）。

①紛らわしさのない表記へ。

例：[亜墨利加] の [墨] が [米] へ（[墨] はメキシコの簡略表記に用いられる）。

[比利時] が [白耳義] へ（[比] はフィリピンの簡略表記に用いられる）。

②覚えやすい表記へ。

例：[倫敦] に [竜動]（主+述）が加わった。[独乙] が [独逸]（修+述）へ交替。

③好字の表記へ。

例：[亜墨利加] に [亜米利加] が加わった。[紐查] が残り [紐約] が他へ交替。

④英語読みに近い音韻表記へ。

例：[普魯士] に [普魯社] が加わった（読みが「プロイセン」「プロイス」系から「プロシャ」系へ）。

⑤和臭。

例：イタリアの「タ」… [大] より [太] 優勢。フランスの「フ」…遅れて登場する [法] が [仏] を追い払えない。

⑥画数の少ない漢字表記へという意識はあまりない。

③王（1992a）…「外国語地名の漢字表記について—「アフリカ」を中心に—」

主題：アフリカを中心に音訳漢字表記の漢字選択意識を探る。

調査対象：①古代から現代に至るまでの日中両国の歴史書、地理書、地図、紀行文、文学作品、教科書、節用集、辞書、百科辞典、新聞などの文献。

②漢字・仮名表記された「アフリカ」と古称「リビヤ」。振り仮名をも含む。

着眼点：中国語表記との関連、音節ごとの漢字選択意識。

結論：①日中それぞれで原音の発音に近い表記が使われるという原則がある。

例：日本では、アフリカの「フ」は [非] から [弗] に交替。

②画数は多くなる場合と少くなる場合が考えられる。

多くなる例：[英吉利] → [啖咭喇] …あまり使われない漢字を使うことで外国地名と意識させたか。

少くなる例：[歐邏巴] → [歐羅巴]、[亜墨利加] → [亜米利加] …より簡略で書きやすい漢字が優先されたか。

③漢字の持つ意味を反映するものがあるが、必ずしも好字になるとも限らない。

好字へ (⊖ → 0 or ⊕)：インドに [身毒] が使われなくなる。

悪字へ (0 → ⊖)：西洋のものを排除しようとした鎖国時代、フランスに [払狼機] をあてた。

字の好悪以外：中国では、海で囲まれたオーストラリアに [奥] [塊] より水のイメージを持つ [澳] があてられる。

④中国製の外国地名表記が日本で通用しない最大の要因は、両言語の音韻体系が違うことに求められる。

2. 調査

2.1. 調査対象

先行研究で調査されていない1875～1925年を範囲とし、できるだけ刊行期間が長い下記の4紙を対象資料とした。また、複数の新聞間で表記選択の傾向を比較するため、1925年以外は各年複数の新聞のデータを採集できるようにした。なお、1930年以降を外したのは、外国地名漢字表記の衰退期に入り、用例数が少くなると予想されるからである。下表は調査対象紙の調査期間である。

	1875	1880	1885	1890	1895	1900	1905	1910	1915	1920	1925
横濱毎日新聞	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—
朝野新聞	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—
萬朝報	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	—
東京朝日新聞	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○

以下に、上記4紙の概略を述べ、記事全体の振り仮名の有無を記号化して示しておく。

・横濱毎日新聞（よこはままいにちしんぶん）[本稿では「毎日新聞」と省略]

1870年12月1日発行された日本最初の本格的邦字日刊新聞。

	1875	1880	1885	1890	1895	1900	1905
振り仮名	△・×	△・×	△・×	△・×	○・×	○・×	○・×

※○は“総ルビ”、△は“ぱらルビ”（文中の一部の漢字にルビを付したものの）、×は“ル

ビ無し”の意。複数の記号が併記されている場合は、記事によって振り仮名の様相が異なることを表す（以下同様）。

・朝野新聞（ちょうやしんぶん）

1872年創刊の新聞『公文通誌』を1874年9月24日改題して、東京で発行された代表的な政論新聞。

	1875	1880	1885	1890
振り仮名	×	×	×	×

・萬朝報（よろずちょうほう）

1892年11月1日黒岩周六（涙香）が東京で創刊した日刊新聞。

	1895	1900	1905	1910	1915	1920
振り仮名	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×

・東京朝日新聞

1879年大阪で創刊された「朝日新聞」が、1888年「めざまし新聞」の譲渡を機にこれを「東京朝日新聞」と改題して東京に進出したもの。

	1890	1895	1900	1905	1910	1915	1920	1925
振り仮名	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×	○・×

2.2. 調査方法

調査範囲中（1875～1925年）の新聞につき、5年ごとに最初の10日分の朝刊記事を調査する。地名漢字表記の使用状況を正確に把握するため、[亜米利加][英吉利]などの表記（原形表記）だけではなく、[米][英国]などの表記（1字表記を含む略称表記）をも採集する。

報道欄・文化欄・小説・投書欄・広告欄などすべての記事から外国地名を採集するが、欄外の記事は除く。印刷の状態が悪く正確に読み取れない部分が多いことや、前日までの再録記事も多くデータが重複する可能性があることが理由である。また、今回は現地でも漢字表記が行われている地名は除く。中国および朝鮮半島における地名（北京・上海・平壤など）がそれである。

同一記事内に同一語が繰り返し使用される可能性があるため、単純な語数ではなく、語が使用された記事数をカウントする。

3. 結果と考察

本稿末尾に付表として「外国地名漢字表記変遷一覧」を掲出してあるので、適宜参照されたい。

3.1. 漢字表記の現れ方

「地域別」「年代別」「振り仮名の有無」「傍線・傍点の有無」の観点から、漢字表記の現れ方を考察する。

3.1.1. 地域別傾向

調査範囲で漢字表記された国名・地名を、アジア・ヨーロッパ・アフリカ・南北アメリカ・オセアニア・その他の5地域に分けると以下ようになる。国名・地名の区別は当時の状況、文脈上で判断し、地名には国名以外の全ての名称を含む。

<アジア>

国名：アフガニスタン、アンナン、インド、えつなん、カンボジア、シンガポール、セロン、トルコ、フィリピン、ペルシャ、もうこ（10国名）

地名：アジア、アデン、アラビア、インドシナ、ウリヤスタイ、カブール、カルカッタ、ガンガ、クーロン、コロombo、コンスタンチノーブル、サイゴン、シャム、ジャワ、スルー、トルキスタン、ハノイ、バンコク、ヒマラヤ、ビルマ、ペナン、ベンガル、マニラ、マラッカ、マレー、ムンバイ、ラングーン（28地名）

<ヨーロッパ>

国名：イギリス、イタリア、オーストリア、オランダ、ギリシャ、スイス、スウェーデン、スペイン、セルビア、ゼルマン、デンマーク、ドイツ、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベラルーシ、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、モンテネグロ、ルーマニア、ルクセンブルク、ロシア（25国名）

地名：アイルランド、アテネ、アントワープ、イングランド、ウィーン、ウェールズ、ウラジオストック、オックスフォード、オホーツク、カムチャッカ、キヤクタ、グレートブリテン、ケンブリッジ、コーカサス、サハリン、サンクトペテルブルク、シベリア、ジュネーブ、スコットランド、ニコライエフスク、ハーグ、バイエルン、バイカル、パリ、バルカン、バルチック、ハンブルク、ブタペスト、プロシヤ、ペーリング、ベルリン、ボルドー、マドリード、マルセイユ、マンチェスター、モスクワ、ヨーロッパ、ライン、リバプール、リヨン、ローマ、ロンドン（42地名）

<アフリカ>

国名：アビシニア、エジプト、スーダン、トランスバール、モロッコ（5国名）

地名：アフリカ、カイロ、スエズ、ポートサイド、マダガスカル（5地名）

<南北アメリカ>

国名：アメリカ、アルゼンチン、エルサルバドル、カナダ、キューバ、コスタリカ、コロ

ンビア、チリ、ニカラグア、パナマ、ブラジル、ペルー、メキシコ（13国名）

地名：カリフォルニア、サクラメント、サンフランシスコ、シアトル、シカゴ、セントルイス、ニューイングランド、ニューヨーク、バンクーバー、マサチューセッツ、メキシコシティ、ロサンゼルス、ワシントン（13地名）

<オセアニア>

国名：オーストラリア、ニュージーランド（2国名）

地名：サモア、シドニー、ハワイ（3地名）

地域別では、下表の通り、ヨーロッパやアジアの国名・地名が多く、南北アメリカ、アフリカ、オセアニアと続く。

	アジア	ヨーロッパ	アフリカ	南北アメリカ	オセアニア
1年1紙	8	14	1	9	2
1年多紙	5	2	1	0	0
多年1紙	1	1	1	0	1
多年多紙	24	50	7	17	2
合計	38	67	10	26	5

アジアは、古くから中国と交流のあった国が多いため、漢名の呼称・表記が多い。例えば、現在のベトナムを表す「アンナン [安南]」「えつなん [越南]」、ウランバートルを表す「クーロン [庫倫]」、モンゴルを表す「もうこ [蒙古]」などである。また、[印度]には“テンジク”という古称で振り仮名の付された例があったり、他地名が片仮名で振り仮名が振られている中で“いんど”と平仮名で振り仮名が振られていたりといった特徴がある。日本の文献でも古くから用いられ、外来語意識が薄れていることのためであろう。アジアでは日中で漢字表記が古くから行われている地名が比較的多いため、当時すでに表記が安定している傾向が強い。全国名・地名39例中、1つの漢字表記例しかないものが26例、そのうち多年または多紙に現れるものが19例ある。

ヨーロッパ・アフリカ・南北アメリカは、1602年『坤輿万国地図』によって中国に知られた国名・地名が多い。最も国名・地名の多いヨーロッパは、全67例中、1つの漢字表記例しかないものが29例、そのうち多年または多紙に現れるものが16例である。アジアに比べると、表記が安定していないものが多いことがわかる。また、日中で別の表記を用いる傾向が強いのも特徴である。国名24例で、現代中国語表記と日本語表記（今回の調査で最も主流だった表記）を比べてみると、14例が異なる。現代中国語表記は、1924年『標準漢譯外國人名地名表』当時とほとんど変わらず、また日本でも1度は受け入れたことのある表記であるにもかかわらずである。1875～1925年が中国語表記から日本風表記への過渡期にあたる国名・地名が多いことも、揺れ・交替の多い理由として考えられる。

アフリカは、10例と少なく、そのうち4例をエジプトの国名・地名が占める。漢字表記が少ないというよりは、当時の新聞に登場した国名・地名が少ないと考えるのが自然だ

う。漢字表記1つのものが8例、そのうち多年または多紙に現れるものが6例で、比較的安定している。

南北アメリカは、13国名ある一方で、13地名中11例はアメリカ合衆国の地名である。アメリカに関する記事が大部分を占めていることを示している。多年多紙に現れる国名・地名17例中、漢字表記が1つのものは6例しかなく、揺れ・交替が目立つ。

オセアニアは各地名、漢字表記が1通りずつのもののみである。

3.1.2. 年代別傾向

年代ごとに、調査した新聞の種類・紙数・記事数も異なるので単純に比べることはできないが、全体像を捉えるために表にまとめた。年代をいくつかのブロックに分けて、大まかな流れを述べていく。

	1875	1880	1885	1890	1895	1900	1905	1910	1915	1920	1925
新聞	毎朝	毎朝	毎朝	毎朝東	毎萬東	毎萬東	毎萬東	萬東	萬東	萬東	東
①国名・地名数	38	45	70	50	56	78	67	70	91	91	60
②略称のみ	0	9	4	4	5	5	6	2	3	4	4
(①-②)	38	36	66	46	51	73	61	68	88	87	56
③異なり語数	58	47	81	64	68	100	84	84	107	108	62
③/(①-②)	1.53	1.31	1.23	1.39	1.33	1.37	1.38	1.24	1.26	1.24	1.11

②の略称は、漢字1字の国名・地名表記、また「漢字1字+ [市・府・都・州・國・洲]」という表記を指す。例えば、[米]、[沙市]、[君府]、[匈都]、[加州]、[英國]、[濠洲]といったものである。(①-②)は、略称だけでなく原形表記のある国名・地名の合計、③の異なり語数は、略称を含めない原形表記の合計である。③/(①-②)は、国名・地名1つあたりの異表記数の平均値であり、揺れの大きさを表す。

「毎日新聞」と「朝野新聞」2紙のみの年代(1875~85)は、紙面数が増えるにしたがって、国名・地名数も増えていく。その割に異表記数は増えず、表記が安定していくことがわかる。1890年になると3紙に増えたこともあり、表記の揺れが大きくなり、1905年までその状態が続く。1905年は日露戦争の記事が多いせいで、[露西亞][露][露國]が爆発的に増える代わりに、他地名の登場数が減るという特徴がある。1910年以降2紙に戻ると、表記は安定傾向になり、1925年東京朝日新聞1紙になると、揺れのあるものはアフリカ、イギリス、オーストリア、シベリア、ジャワ、ドイツの6つで、それぞれ2表記しかない。

下表は1900年以降の東京朝日新聞の国名・地名数を示したものである。

	1900	1905	1910	1915	1920	1925
国名・地名数	64	57	63	81	79	60

第1次世界大戦(1914年開戦、18年ドイツ降伏、19年ベルサイユ条約で講和成立)があった影響もあり、登場する国名・地名数は1915~20年頃ピークに達したが、1925年に一気に

減る。また、個々の地名の登場数も減り、外国地名の漢字表記が衰退期に入っていることを表している。

3.1.3. 振り仮名の有無

1890年頃までの「毎日新聞」は“ばらルビ”か“ルビ無し”、「朝野新聞」はほぼ“ルビ無し”であった。そのため、地名によって振り仮名の有無に多少差があり、同一記事中で他の語句や地名に振り仮名がないにもかかわらず、一部地名に振られている例があった。そのほとんどは都市名や一部国名で、[麻沙朱色 (マスサ子ユセツ、)] [波耳多 (ポルドー)] [悉徳尼 (シドニー)] などがある。漢字表記の認知度が低いと思われ、それを補うために仮名が振られたのだろう。以下に記事全体にはほぼ振り仮名のない「朝野新聞」(1875～90年)で、仮名が振られた例を挙げる(1880・90年は実例無し)。

1875年	[<u>諾耳回 (ノルライ)</u>] [<u>榜葛刺 (ベンガラ)</u>] [<u>桑港 (サンフランシスコ)</u>] [<u>紐育 (ニウヨルク)</u>] [<u>止邊里亞 (サイベリア)</u>] [<u>倫敦 (ロンドン)</u>] [<u>巴里 (パリ)</u>] [<u>伯得堡 (ベートルボルク)</u>] [<u>維納 (ヒンナ)</u>] [日内瓦 (セ子バ)] [<u>嵯峨連 (サガレン)</u>] [<u>伯靈 (ベルリン)</u>] [君士旦丁諾波爾 (コンスタンチノーブル)]
1885年	[<u>西北利亞 (シベリア)</u>] [<u>海參崴 (ハイソンワイ)</u>]

1875年はほとんどが都市名である。また、2重傍線を付したものは後年の「朝野新聞」で現れても仮名が振られなかった地名であり、年代が下ると振り仮名が減少する傾向があることを示している。

一方、「萬朝報」や「東京朝日新聞」、1895年頃以降の「毎日新聞」の記事は、“総ルビ”か“ルビ無し”であった。つまり、記事全体に振り仮名があれば、自動的に外国地名にも仮名が振られ、その逆も然りということである。そのため、地名の認知度と振り仮名の有無に相関はあまり見られなかった。

また、認知度とは関係なく振り仮名が付される場合が2通りある。1つ目は[伊國 (イタリー)] [佛國 (ふらんす)] [葡 (ポルチュガル)] など略称に原形呼称の仮名を振る例である。略称は使用頻度が高く、それぞれどこを指すかは明治期すでに認知されていたと考えられるので、何らかの意図で字面どおりに読ませないようにしたのだろう。2つ目は、[印度 (テンジク)] [米國 (あちら)] [波苦痴苦 (ばるちく)] のような宛字で、上の略称同様の理由で仮名が振られたと考えられる。

振り仮名が平仮名か片仮名かも、ほぼ新聞・年代・記事の種類による。ただし、外国地名全体に片仮名で振り仮名がある場合に、一部地名で平仮名が振られる例があった。たとえば、[印度 (いんど)]、[印度支那 (いんどしな)]、[浦鹽／潮 (うらじほ)]、[越南 (ゑつなん)]などで、これらが日本語化していることが表れている。

3.1.4. 傍線・傍点の有無

漢字表記された外国地名を他の語から際立たせる工夫として、傍線や傍点が考えられ、初期の年代ほど、また使用頻度の低い地名ほど、これらが用いられると予想された。結果

は、2重傍線が1880年の「毎日新聞」海外新報欄の外国地名すべてと1905年の「萬朝報」の「米」1例に引かれるのみ、傍点が1900年の「毎日新聞」と1910年の「東京朝日新聞」にそれぞれごく一部現れるのみで、地名による差異は見られなかった。漢字表記の普及度は当時すでに高く、際立たせる工夫も特に必要なかったと考えられる。

3.2. 漢字選択の傾向《総論》

「音訳表記の漢字選択」「意識と略称」「新聞紙別」の観点から、漢字選択の傾向を述べる。

3.2.1. 音訳表記の漢字選択

外国地名の音訳には、当時の中国漢字音や伝統的な日本漢字音によるもの（音音訳）と、漢字の訓によるもの（訓音訳）とがある。前者は中国由来表記、あるいはそれを日本で改良して作った表記と言えるのに対し、後者は確実に日本独自表記だろう。今回の調査で登場した訓音訳の例は「櫻面都〈サクラメント〉」「眞菲〈マニラ〉」「浦鹽/潮斯德〈ウラジオストック〉」のみであった。ウラジオストックは中国と日本とで呼称が異なるため、そもそも音音訳と訓音訳が対立しない。しかし、マニラは音音訳に訓音訳が押され淘汰される。この例や他地名の大部分で訓音訳が登場しないことから見ても、中国では当然ながら、日本でも音音訳が主流であることが確認できる。

以下、音訳表記（音音訳）の漢字選択について見ていこう。白（1999）は、地名音訳表記に用いられている漢字を分解し、漢字とそれぞれが表す音との対応を調査していて参考になる。

ここでは、国名・地名に使用されることが特に多い“ア・コ・シ・ス・マ・ラ・リ・ル”について、中国表記との関係を中心に漢字選択の特徴を述べることにする。なお、1924年当時の表記である『標準漢譯外國人名地名表』と同様の字を選択しているものは網掛けで示した（確認できないものは現代中国語表記）。

①アー亜・阿・雅

〔亞〕…アジア・アデン・アビシニア・アフガニスタン・アフリカ・アメリカ・アラビア
ア・アルゼンチン・イタリア・コロンビア・サモア・シベリア・ルーマニア・ロシア（14地名）

〔阿〕…アフガニスタン・アフリカ・アラビア（3地名）

〔雅〕…アテネ（1地名）

〔亞〕が圧倒的に優勢である。語末の“ア”は日中ともに〔亞〕のみ使用されるが、語頭の場合、中国ではアルゼンチン・アフガニスタン・アフリカ・アラビアが〔亞ya〕から〔阿a〕に変化している。今回〔阿〕を使用した3地名すべてがこれに含まれており、中国からの影響が感じられる。

②コー哥、古、其、可

- [哥] …オホーツク（振り仮名“オコスク）・コスタリカ・コロンビア・メキシコ・メキシコシティ・モロッコ（6地名）
- [古] …コロンビア・コロンボ・トルコ・メキシコ・もうコ（5地名）
- [其] …トルコ（1地名）
- [可] …メキシコ（1地名）

日中で〔哥〕をあてるものが多い。中国で〔哥〕があてられなかった地名に日本で〔古〕をあてる傾向がある。

③シー市、斯、西、悉、止、支、是、士

- [西] …アビシニア・シベリア・プロシア・ベラルーシ（振り仮名“はくロシア”）・メキシコ・メキシコシティ・ロシア（7地名）
- [斯] …シカゴ・メキシコ・ベルシャ（3地名）
- [士] …プロシア・ロシア（2地名）
- [市] …シカゴ（1地名）
- [悉] …シドニー（1地名）
- [止] …シベリア（1地名）
- [支] …インドシナ（1地名）
- [是] …メキシコ（1地名）

日中ともに〔西〕をあてるものが多い。中国ではロシアに1924年当時・現在ともに〔斯〕をあてているが、1602年『坤輿万国全図』当時は〔西〕をあてていた。

④ス・スー—蘇、西、士、是、斯、識

- [斯] …アフガニスタン・ウラジオストック・コンスタンチノーブル・サンクトペテルブルク（振り仮名“セントピータースブルク”）、トルキスタン・モスクワ（6地名）
- [蘇] …ウリヤスタイ・スーダン・スールー・スエズ・スコットランド（5地名）
- [西] …スイス・ス페인・フランス（3地名）
- [士] …コンスタンチノーブル・ス페인（2地名）
- [是] …ス페인（1地名）
- [識] …マンチェスター（1地名）

〔斯〕と〔蘇〕が拮抗する。中国では語頭の“ス”に〔蘇〕をあてるものが多く、日本でもその影響が現れている。日本では語中に〔斯〕をあてるものが多いが、登場数の多いイス・スペイン・フランスといった国名では〔西〕が使われる。

⑤マー馬、眞、麻、抹、甸、萬

- [馬] …デンマーク・パナマ・ヒマラヤ・マダガスカル・マニラ・マルセイユ・マラッカ・マレー・ルーマニア・ローマ（10地名）
- [麻] …マサチューセッツ・マニラ（2地名）

- [眞] …マニラ (1 地名)
- [抹] …デンマーク (1 地名)
- [甸] …ビルマ (1 地名)
- [萬] …マドリード (1 地名)

日中で [馬] が最有力。中国では上で網掛けした地名以外にマサチューセッツ・マドリードも [馬] があてられている。

⑥ラ—來、刺、拉、萊

- [拉] …アラビア・ニカラグア・ブラジル・マニラ・マラッカ (5 地名)
- [刺] …アラビア・ブラジル・マニラ (3 地名)
- [來] …ヒマラヤ (1 地名)
- [萊] …ライン (1 地名)

中国ではアラビアが19世紀から1924年にかけて、マニラが1924年から現在にかけて、[刺ci]から [拉la] へ交替しており、現代中国語音で原音に近い表記を選択していることがわかる。今回の調査結果でも、アラビア・マニラは年代が下るほど [拉] の割合が増え、中国からの影響が感じられる。また、ブラジルは中国で“ラ”を音訳する習慣がなかったため、日本で独自に [刺] をあてたものとみられる。

⑦リ・リー—利、里、理、律、列、烈、李

- [利] …アフリカ・アメリカ・イギリス・イタリア・ウリヤスタイ・オーストラリア・オーストリア・シベリア・チリ・ハンガリー・ブルガリア (11地名)
- [里] …イタリア・コスタリカ・シベリア・パリ・ブルガリア・マドリード・リヨン (7 地名)
- [理] …チリ・パリ (2 地名)
- [律] …フィリピン (1 地名)
- [列] …グレートブリテン (1 地名)
- [烈] …グレートブリテン (1 地名)
- [李] …リバプール (1 地名)

日中で [利] が主流。イタリアやチリは、古く [里] だったものが [利] に交替した。日本で [利] に次ぐ [里] は、主に [利] を使う地名の揺れとして、また中国で [黎] を使う地名 (コスタリカ・パリ) に使われる。

⑧ル・ルー—耳、爾、刺、羅、兒、路、祿、露

- [爾] …アイランド・アルゼンチン・カブル・コンスタンチノーブル・セルビア・トルコ・バイカル・バルカン・ブラジル・ブルガリア (10地名)
- [耳] …アイランド・セルビア・ゼルマン・トルキスタン・トルコ・ノルウェー・ルギー・ボルドー・マルセイユ (9 地名)
- [兒] …ブラジル・ベルシャ (2 地名)

[羅] …バルチック・ルーマニア (2 地名)

[祿] …スールー (1 地名)

[露] …ベルー (1 地名)

[刺] …ベンガル (1 地名)

[路] …セントルイス (1 地名)

日本では[爾][耳]が拮抗している。中国では[爾]がより多く、今回の調査で[耳]の例しか見られなかったボルドーやマルセイユにも[爾]をあてている。[爾][耳]は同音であるため、日本ではより簡略で身近な[耳]をあてる傾向が強いと考えられる。

以上、今回の調査で、①～⑧それぞれの音に最も多くあてられた漢字が、20世紀の中国表記のそれと一致しているという結果が出た。つまり、「アー亜」「コー哥」「シー西」「スー蘇」「マー馬」「ラー拉」「リー利」「ルー爾」の音訳が、ほぼ同時代日中で共通して最もポピュラーであったとすることができるだろう。また、上の10例だけではなく、全体でも中国表記の影響を色濃く受けていると推測される。しかし、「コー古」「ルー耳」など、中国より使用例の多いものもある。これらは、より簡略で身近な漢字が選択された例と考えることができる。

3.2.2. 意識と略称

外国地名の漢字表記は音訳が一般的である。しかし、中には意識されているものもあり、今回の調査中にもいくつか見られた。ここでは、意識表記にはどのようなものがあるか類型化するとともに、音訳表記も併用される場合の使用割合を考えていきたい。また、地名の略称にも意識の要素があることから、略称表記についてもあわせて述べる。

意識に関しては、荒川(2000)の「純意識」「半意識」「その他」の分類を利用する。略称は、「音訳表記の一部+その土地の実態を表す語」で構成されているものをいい、例えば[桑港]が挙げられる。荒川(前掲)によると、[桑]は音訳表記[桑方西斯哥]の頭文字だという。

以下に、今回採集した漢字表記の中から、単純な音訳以外の表記を「純意識」「半意識」「その他」(土地の実態を表した訳)および「略称」に分類して表の形で示す。[聖彼得堡]や[聖彼得斯堡]のように同一地名で何通りかの表記がある場合は、代表的な表記を記した。調査範囲内で音訳表記も確認できたものは、網掛けにした。「略称」には[米国][英国]のような[～国]も含まれるが、大量にあるので表では省いた。

意識表記のある地名は、音訳表記が併用されるものが少ない。意識表記は音訳表記に比べ、文字数が減る場合が多い(例えば、[聖]で表すセントやサンクト、[堡]で表すブルクを音訳しようとするれば、2・3字の漢字が必要になってしまう)ので、紙面が限られ速報性の求められる新聞では特に好まれたのだろう。ニューヨークだけは、半意識[新育]より音訳[紐育]が圧倒的に使用されるが、これは文字数が変わらず意識にする利点がないからだと考えられる。

略称表記のある地名も、音訳原形表記が併用されるものが少ない。略称の誕生は原形表

記より当然遅いはずだが、1875年以降は略称表記も十分に普及していたようである。さらに、[濠洲 (がうしう)]・[歐洲 (おうしう)]・[加州 (かしう)]・[君府 (くんふ)]・[華府 (くわふ)]・[桑港 (さうかう)]・[尼港 (にかう)] と振り仮名が付されているものが多く、より日本語化していることも感じられる。併用される地名でも、[濠洲] [歐洲] などは原形より圧倒的に使用され、意識同様、文字数の少ない表記が好まれたことがわかる。

純意訳	[牛津]：[牛=Ox] + [津=ford] <英語> [黒山]：[山=Monte] + [黒い=negro] <ラテン語> [河内]：[河=Ha] + [内=noi] <漢越語>
半意訳 (音訳+意訳)	[劍橋]：[劍—Cam] + [橋=bridge]
	[波羅的]：[波羅—Bal] + [的=tic]
	[墨西哥市]：[墨西哥—Mexico] + [市=city]
	[漢堡]：[漢—Ham] + [堡=burg] [盧森堡]：[盧森—Luxem] + [堡=burg]
半意訳 (意訳+音訳+意訳)	[聖彼得堡]：[聖=Saint] + [彼得—Peters] + [堡=burg]
	[新英洲]：[新=New] + [英—Eng] + [洲=land]
半意訳 (意訳+音訳)	[新西蘭]：[新=New] + [西蘭—Zealand] [新育]：[新=New] + [育—York]
	[大不烈顛]：[大=Great] + [不烈顛—Britain]
	[白露西亞]：[白=Belo] + [露西亞—russiya]
その他	[雪峰] (ただし、Himalaya のhima は梵語で「雪」の意。)
略称	[濠洲]・[歐洲]・[馬島]・[加州]・[君府]・[羅府]・[華府]・[匈都]・ [李浦]・[浦港]・[桑港]・[尼港]・[沙市]

なお、表に入れていないが、[安土府]・[恒河]・[櫻面都] は音訳でありながら、土地の実態を反映した漢字が用いられている。

3. 2. 3. 新聞別傾向

ここでは、新聞ごとに表記に傾向差が見られるものについて、国名・地名の登場数が多い「萬朝報」「東京朝日新聞」を中心に述べていく。

①ウラジ^オ (ストック)

[鹽] と [潮] の2表記があり、全体的には [鹽] がやや優勢。2表記とも日本独自表記。「萬朝報」は全37例中28例が [鹽]、「東京朝日新聞」は全81例中49例が [潮] であった。

②カナダ

[陀] [太] [多] の3表記があり、[陀] が最多、[太] がそれに次ぐ。中国で [大] だっ

たものが日本で [太] に交替したものと見られる。[陀] は日本独自または日本的な表記である。「毎日新聞」「朝野新聞」含め各紙で [陀] が優勢だが、「萬朝報」は全33例中20例が [陀]、13例が [太]、「東京朝日新聞」は全36例中34例が [陀]、2例が [太] と傾向差がある。特に「東京朝日新聞」では1905年以降 [陀] のみになる。

③シカゴ

「萬朝報」は [古] のみ8例、「東京朝日新聞」は [高] のみ11例。中国では [哥] のみ確認できた。

④シベリア

[伯] [比] の2表記があり、中国系の [比] が先に現れるが、[伯] が登場以降やや優勢で共存。「萬朝報」は全63例中53例が [比]、「東京朝日新聞」は全104例中96例が [伯] と傾向差がある。

⑤セルビア

[維] [比] の2表記があり、[維] が中国的、[比] が日本独自または日本的な表記である。「毎日新聞」は [維] のみ、「萬朝報」は [維] 優勢（5例中4例）、「東京朝日新聞」は [比] のみ、と傾向差がある。

⑥トルコ

[其] [古] の2表記があり、[其] が中国的で主流、[古] は日本独自または日本的な表記である。「萬朝報」は全30例中23例が [古]、「東京朝日新聞」は全46例中43例が [其] と、傾向差がある。特に「東京朝日新聞」では1910年以降 [其] のみになる。

⑦ハンガリー

[匈] [洪] [匈] の3表記があり、[匈] [洪] はともに中国由来と推測されるが、中国での実例は [匈] のみ確認できた。使用度でいえば [匈] が中国寄り、[洪] が日本寄り。[匈] は [匈] の誤字だと思われ、中国側資料で用例が確認できなかった。「萬朝報」では全23例中すべて [匈]、「東京朝日新聞」では全25例中 [洪] 19例という傾向差がある。

以上、「萬朝報」と「東京朝日新聞」とを比較すると、「萬朝報」がより中国系表記を受け継ぎ、「東京朝日新聞」が日本的な表記を使用する傾向がある。②カナダの“ダ”は [太] より [陀]、⑤セルビアの“ビ”は [維] より [比] の方が明らかに読みやすい。また、④シベリアの“ベ”についても、「ベー伯」は類例がある（[伯林] [伯耳義]）が、[ベー比] には類例がない。「東京朝日新聞」は読者である日本人の感覚に合った表記をする傾向が強いといえるだろう。

4. まとめ

4.1. 漢字表記の現れ方

①全体数

1920年から1925年で外国地名漢字表記の全体数は一気に減り、漢字表記される地名の種類も減少する。今回は、漢字表記以外（仮名表記）の用例を採集しなかったため、漢字／

仮名表記の正確な割合を求めることはできないが、1920年代に漢字表記が衰退していくことは明らかであろう。すでに、国立国語研究所（1987）の『中央公論』調査、深澤（2003a）の『太陽』調査で、1926年を境に漢字表記と仮名表記の立場が逆転することが指摘されているが、これらの雑誌同様の傾向が新聞にも見られる。

②表記の揺れ

年代が下ると揺れが減り、安定するという原則があるが、新聞の種類が増えるほど揺れは増える。新聞によって使用する文字が異なる地名もあるからだと考えられる。

③ルビ

ルビは、認知度の低い地名の漢字表記を補助する手段としては、1890年頃まで「毎日新聞」「朝野新聞」に存在する。そのほとんどが都市名やごく一部の国名である。一方、「萬朝報」「東京朝日新聞」や1895年以降の「毎日新聞」は、記事によって総ルビカルビ無しに分かれるため、地名の認知度による差異が見られなくなる。ただし、記事の執筆者が特別な読み方をさせたいことを示す手段としては、各紙・各年代で存在する。

④傍線・傍点

漢字表記された外国地名を他の語から際立たせるために存在するかと予想していたが、実際にはほとんど見られなかった。少なくとも新聞においては、すでに1875年以降、地名の漢字表記が普及していたものと思われる。

4.2. 漢字表記選択の傾向と意識

日中両国、あるいは1875～1925年の新聞でどのような漢字選択傾向が見られるかを以下に述べていく。なお、“→”は時代が下るにしたがって左から右へ変化していったことを示し、“<”は左より右の数が多いいことを示す。

①原音に近い表記の選択

王（1992a）の指摘が適合するので、ここでは今回の調査で明らかになった例を挙げる。

<日中共通> <日本独自> <中国独自> <1875～1925年の新聞独自> に区分して掲げる。

<日中共通> アラビア・マニラ：[刺→拉]、イングランド：[倫→蘭]、ベルリン：[靈<林]、モスクワ：[古・哥<科]

<日本独自> アフリカ：[非<弗]、イタリア：[大<太]、カナダ：[太・多<陀]、キューバ：[古巴<玖馬]、バイカル：[拜<貝]、パリ：[黎・勒→里]、フランス：[法<仏]

<中国独自> カプール：[加→喀]

<新聞独自> カイロ：[羅<樓]、コロンボ：[科・考・格<古]、サモア：[摩・麻・母<毛]、シドニー：[雪<悉]、バンクーバー：[凡<晩]、マラッカ：[満<馬]

日本独自の例はよく目にする国や都市の名が多い。使用頻度が高いからこそ、中国由来表記にある違和感が目立ち、日本人なりの工夫を加えたのだと考えられる。明治・大正期までに独自に変化し、以後現在に至るまで中国由来表記に脅かされることなく残存している。新聞独自の例は、今回他の日中資料で確認できなかった、または確認できたが主流ではな

い表記を挙げた。大衆の目に触れる新聞だからこそ、読み違えられる恐れの少ない表記を選択したのではないかと考える。

②紛らわしさのない表記の選択

佐伯 (1986a) で、アメリカ ([墨→米])・ベルギー ([比利時→白耳義]) の例が挙げられていることはすでに述べたが、今回の調査で新たに確認できた例がある。

(1) アフリカ…王 (1992a) は、中国で [亜] が [阿] に交替していくのに対し、日本では [亜] が継承される傾向が強いと述べているが、今回の範囲では [阿] に交替していく。→略称にすると [亜] はアジアと紛らわしいので [阿] へ。

(2) オーストラリア…王 (1992b) は中国で、佐伯 (前掲)・西浦 (1971) は明治維新期の新聞で [澳] [埗] が用いられているとしていたが、今回の範囲では [濠 (豪)] しか用いられない。→ [澳] [埗] はオーストラリアと紛らわしいので [濠] へ。

オーストラリア…… [澳] は [埗] に淘汰されていく。→ [澳] はオーストラリアと紛らわしいので [埗] へ。

(3) ベーリング…中国側資料では [白令] [伯林] が現れるが、日本では [白令] が使用される。→ [伯林] はベルリンと紛らわしいので [白令] へ。
ベルリン……中国では [柏林] [伯林] と2表記あったのが、現在 [柏林] だけになる。→ [伯林] はベーリングと紛らわしいので [柏林] へ。

(4) ベルー…今回の範囲で [白露] [伯露] が [秘露] に淘汰された。→ [白露] は略称にするとベルギーと、そのままでもベラルーシと紛らわしく、[伯露] は略称にするとブラジルと紛らわしいので [秘露] へ。

(5) ベルギー…今回の範囲で [比耳義] [伯耳義] が [白耳義] に淘汰された。→略称にすると [比耳義] はフィリピン、[伯耳義] はブラジルと紛らわしいので [白耳義] へ。

ベルギーに [比] が用いられなくなったのは発音上の問題が大きく、オーストラリアに [澳] が用いられなくなったのは漢字の意味上の問題が大きいだろう。しかし、その他については紛らわしさの回避が漢字選択の主要因になったと見てよい。特に新聞では1字表記や略称 [～国] が用いられることが多く、1字 (特に頭文字) だけで国の区別がつくことが重要視されたのではないか。

③漢字の意味の反映

好字あるいは悪字への変化については、すでに佐伯 (1986a)・王 (1992a) で指摘されているので、ここでは省略に従う。今回の調査で新たに見出した例を挙げると、フィリピンの一字目で [非] が [比] に淘汰される例がある。中国からの影響・発音上の問題とも関係がなく、悪字から中性的な字への変化だろう。また、日露戦争中の1905年、敵国艦隊名でもあるバルチックに [波苦痴苦] [婆] をあてた例があったのは、悪字の例といえる。

ただし、あくまで「波羅的」という安定した表記があった上での一時的（個別的）宛字である。

好悪以外の意味が反映された漢字選択は、王（1992b）が指摘したオーストラリア（[奥・塙]より[澳]が用いられる）の例の他に、オーストリアにも見られた。内陸国であるオーストリアで[塙]が[澳]に淘汰される現象で、オーストラリアとは逆の例である。また、アジアに一時期あてられた[亜西亞]が[亜細亜]に淘汰された例も、西洋のヨーロッパに対して東側にあるアジアに[西]をあてる違和感が一因としてあると思われる。

[安土府]・[恒河]・[櫻面都]といった音訳でありながら、その土地の実態をあらわす漢字の選択もここに入れてよいだろう。

④ 字数の少ない表記の選択

マテオ・リッチの1602年『坤輿万国全図』やアレーニの1623年『職方外紀』などに見られる漢字表記は、1字1音式の長い当て字表記が多い。対して、中国人が著した1852年『海国図志』や1861年『瀛環志畧』にはそれより短い表記が多くなる。このように時代が下って中国人や日本人が改良を重ねる中で、字数が少なくなっていくのは一般的な傾向である。

新聞について言えば、速報性が求められ、また紙面に限られるという特性に合わせ、短い表記が選択される傾向が特に強い。字数の異なる異表記を持つ地名（略称や短縮表記を除く）21種のうち、より短い表記が最多だったもの、または短い表記へ交替していくものは以下の16種あった。

<3字<2字> オランダ・ニューヨーク・ノルウェー・パリ・ペルシャ・ポーランド、
 <4字<3字<2字> アイルランド、<4字→3字> アルゼンチン、<4字<3字> イタリア・オーストリア・シベリア・ブルガリア・プロシャ・ルーマニア、<6字<5字<4字> サンクトペテルブルク、<7字<5字> コンスタンチノーブル

逆に、長い表記が優勢だったものは以下の5種である。

アフガニスタン（[亞加業坦<阿富汗斯坦]）、アメリカ（[米利堅<亜米利加]）、ウィーン（[維納<維也納]）、マルセイユ（[馬塞<馬耳塞]）、ブラジル（[伯西兒・伯刺西<伯刺西爾・伯拉西爾]）

これらは、短さより読みやすさが優先された例といえるだろう。

また、ウェールズ[威士・威斯]・オーストラリア[濠太利]・カルカッタ[甲谷陀]は、それぞれ2字・3字・3字の用例しか今回採集できなかったが、一般的にはより字数の多い表記が主流である。特に新聞に適した表記と言えるだろう。

字数を少なくする方法としては、さらに略称・短縮表記・意識がある。略称はどの地名も1～2字に縮めることができるので広く用いられ、年代が下るほど増えていく。[阿富汗] [浦鹽]のような短縮表記も5地名で見られ、特に[浦鹽/潮]は20世紀以降急激に増加する。

⑤ 筆画数の少ない漢字の選択

あくまで副次的な要因としてだが、挙げられると思う。王（1992a）では、「筆画数の多少」について、多くなる場合と少なくなる場合があるとしている。特に古い年代に関して、普通の語と紛れないように、あまり使われない画数の多い漢字が使われることがあったのは事実であろう。しかし、今回調査した1875～1925年の新聞に関しては、積極的に筆画数を多くする方向性は見られない。逆に中国表記より筆画数の少ない方を選択する例ならば見られる。たとえば、「ル」に対して〔爾〕をあてるものに〔耳〕をあてたり、“コ”に対して〔哥〕〔其〕をあてるものに〔古〕をあてたりといった例である。

⑥伝統的な表記に使われた漢字の選択

日本では、中国から受け入れた表記を日本人の感覚に合った漢字表記に改良してきた。両国の音韻体系が異なるためである。一方で、中国でもその時々漢字音にあった表記やより字数の少ない表記に改良が進んだ。中国で生まれ、改良された表記の大部分は日本に輸入される。しかし、発音上・字数上の問題がなければ、日本では伝統的に使われてきた方を選択する傾向が強い。すでに王（1992a）が、アフリカの“ア”について中国で〔亜〕から〔阿〕に交替したのに対し、日本では伝統的な〔亜〕のままであると指摘している。さらに、今回の調査では多数同様の例が見つかり、外国地名全体の傾向として述べるのが可能になった。

《中国で交替し、日本で交替しなかった例（日本表記・中国表記）》

アラビア（亜刺比亜・アラバ）、オランダ（和・荷）、カナダ（奈・拿）、シンガポール（嘉・加）、デンマーク（丁抹と唎馬・丹麦）、ノルウェー（諾・那や挪）、ブラジル（伯・巴）（爾・ ϕ ）、フランス（仏・法）、ベンガル（榜葛刺・孟加拉）、ロシア（ロシア系・オロシャ系）

⑦その他の選択要因について

佐伯（1986a）で指摘された「おぼえやすい表記の選択」は、あまり関係がないのではないか。佐伯は例として〔独乙〕から〔独逸〕への交替を挙げ、〔独逸〕が「修+述」の関係で覚えやすいからだとして述べている。しかし、これは漢字音が原因ではないかと考えられる。〔逸〕：逸イツ逸イチと〔乙〕：乙オツ・オチ逸イツとを比較した場合、日本人にとって、より“イツ”と読みやすいのは前者であろう。〔乙〕を“イツ”と読む言葉は漢籍由来のものが多いため難しく耳遠いのにに対し、“オツ”と読む言葉は「甲乙つけがたい」「乙にからむ」など身近なものが多い。“オツ”と読むイメージの強い〔乙〕より、素直に“イツ”と読みやすい〔逸〕が選択されたのではないと思われる。佐伯は〔倫敦〕に〔竜動〕が加わった例をも挙げ、〔竜動〕が「主+述」の関係で覚えやすいからだとしている。しかし、今回の調査で〔龍（竜）動〕は20世紀以降、慣用されてきた〔倫敦〕に淘汰されることが明らかになり、「おぼえやすさ」が漢字選択に及ぼす影響はほとんどないと言ってよいだろう。

また、同じく佐伯（前掲）で述べられた「英語読みに近い音韻表記へ」は、今回の調査範囲では必ずしもあてはまらない。佐伯は、プロシアについて読みが「プロイセン」「プ

ロイス」系から「プロシャ」系へ変化し、それが表記面に反映され [普魯士] に [普魯社] が加わった例を挙げている。しかし、今回の調査範囲で [普魯社] は [普魯西] に淘汰され、[普魯西亞] が辛うじて1例現れるのみとなってしまう。シベリアも英語読み「サイベリア」系が「シベリア」系に、パリも「パリス」が「パリ (一)」に交替し、[巴里斯] は1875年を最後に使われなくなる。ただし、サンクトペテルブルクのように、現在よりも呼称・表記ともに英語読みに近い例は見られた。

以上から読み取れる、日本人の、特に1875～1925年の新聞における漢字選択意識は次のようにまとめられる。

「①原音に近い表記の選択」「②紛らわしさのない表記の選択」「⑥伝統的な表記に使われた漢字の選択」は、よりわかりやすく正確に伝えようとする意識の表れである。言葉は常に機能的に変化するが、外国地名の漢字表記も例外ではない。漢字の中国語音と日本語音にずれがあるのは当然のことで、自分達の場合に合うように表記を変えていく (①)。また、中国でできた新しい表記は、まず一度取り入れ、古い表記と何年間も共存させたいうえで、取捨選択していく。古い漢字表記に、音や呼称との不一致といった問題が無ければ、わざわざ交替もさせない (⑥)。慣用されてきた表記を使った方が効率的だからである。さらに、複数の地名に同じ漢字が用いられている場合には、一方が異なる漢字に交替し、紛らわしさを回避する (②)。同音衝突をおこす言葉同士や類似の意味を持つ言葉同士において、一方が淘汰されていくようなものである。この傾向は時代が下り、漢字1字または [○國] といった略称が多く用いられると、一層顕著になる。

「③漢字の意味の反映」は、漢字の表意性を生かす意識の表れである。特にその土地の実態に合わせた漢字を用いる例がいくつか見られ、わかりやすい表記にもつながっている。ただし、好字・悪字についてはそれほど積極的な意識は見られない。好字への変化といっても、無意味に悪字を使わず、中性的な字を用いるといった程度のことである。悪字が用いられたのは日露戦争中のバルチックの、あくまで例外的な表記のみである。日露戦争中のロシアや、第1次世界大戦中の敵対国についても、平時と変わらない表記を用いていた。むしろ、好字への志向性は日本表記より中国表記に強く感じられる。日本の [独逸] [亜米利加] に対して、中国の [德意志] [亜美利加] の方がはるかに好字であることは明らかであろう。

「④字数の少ない表記の選択」は、利便性・効率を求める意識の表れである。誤解なく伝わるのであれば、わざわざ長い表記を用いる必要もない。特に限られた紙面にできるだけ多くの情報を載せなければならない新聞では、なおさら顕著な傾向である。1字1音式の音訳からの改良、さらに意識や略称を用いることで、より短い表記を実現した。効率をよくする手段として「⑤筆画数の少ない漢字の選択」もあるが、他の①②⑥といった選択要因がより重視され、それほど実例は確認できなかった

2重下線を引いて示した、以上3つの意識が漢字選択の傾向に表れていると結論される。

5. おわりに

本稿では、1875～1925年の新聞4紙を用いて、外国地名の漢字表記の現れ方や漢字選択意識を探った。前半期は表記に揺れは見られるものの、漢字表記の認知度が上がり、振り仮名や傍線・傍点といった補助要素が徐々に必要とされなくなっていく時期である。特に主要国の漢字表記はかなり定着していた。後半期は、日本が関わる2つの大きな戦争があったこともあり、海外情報への要求はさらに強まっていたと見られ、紙面数・記事数・字数自体が前半期より増えた。よって、紙面に現れる外国地名およびその漢字表記もさらに増大していった。漢字表記は徐々に安定していき、揺れが見られる場合も主流の1表記が突出して現れる傾向が強まる。また、利便性を追求した略称がさらに隆盛した。しかし、1920～25年にかけて外国地名の漢字表記自体が衰退期に入り、一気に登場数も減少することとなった。

このような時代において現れた漢字選択傾向や意識は、「4. まとめ」でも述べたとおり、先行研究で指摘されてきたものとそれほど大きな差異は見られなかった。しかし、今までほとんど空白の時期として残されていた1875～1925年という、漢字表記の安定期から衰退期にかけての全体像をつかめた点は、収穫であった。個々の地名について大まかではあるが、中国表記からの影響や日本での表記の変遷をたどることにより、明治・大正期の外国地名漢字表記の実態、認知度、漢字選択傾向からうかがえる意識などについて、多地名のデータをもとに実証的に論じられた点で意味あるものと考えている。

一方、調査対象を漢字表記（とその振り仮名）に限定したことで、仮名表記との現れ方の違いを明確にすることができなかった点、特に中国側資料についての調査が行き届かず、当時の中国表記との比較が十分でない点、世界史や外国語に関する知識が不足し、当時の地名の原音・呼称・表記の相関についての考察が不十分である点などは、今後の課題である。また、当時新聞とともに広い読者層を持っていた雑誌類についても調査ができれば、表記の実態をより鮮明に映し出すことができたであろう。後考に俟ちたい。

【参考文献】

《外国地名表記に関する研究文献》

- 荒川清秀（2000）「外国地名の意識—「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」—」『文明21』5
- 井手順子（2005）「外国地名表記について—漢字表記から片仮名表記へ—」『国立国語研究所報告122 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 王 敏東（1992a）「外国地名の漢字表記について—「アフリカ」を中心に—」『語文』58
- （1992b）「外国地名の漢字表記について—「オーストラリア」を中心に—」『待兼山論叢（文学篇）』26
- （1993）「外国地名の漢字表記についての一考察—「ベルシャ」を中心に—」『台湾日本語文学報』5

- (1994) 「日本語におけるイギリスの呼称について」『台湾日本語文学報』 6
- (1996) 「漢字による外国地名の略称について」『国語文字史の研究3』和泉書院
- 貝美代子 (1997) 「国定読本の外来語表記形式の変遷」『国語論究6 近代語の研究』明治書院
- 金 敬鎬 (1999) 「日・中・韓における外国地名の漢字音訳表記—近代の文献を中心として—」『専修国文』 65
- 国立国語研究所 (1987) 「外来語の研究」『国立国語研究所報告89 雑誌用語の変遷』秀英出版
- 小林雅宏 (1982) 「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」『文研論集』(専修大学大学院) 8
- 佐伯哲夫 (1986a) 「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」『神戸大学国語年誌』 6
- (1986b) 「官板バタバヤ新聞における外国地名表記」『関西大学文学論集』 36
- 孫 桂琴 (2000) 「『海国図志』と『亜墨利加総記後編』とをめぐって—国名、地名を中心に—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 9
- 西浦英之 (1970) 「近世に於ける外国地名称呼について」『皇學館大学紀要』 8
- (1971) 「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称呼・表記について」『皇學館大学紀要』 9
- 白 淑敏 (1999) 「明治初期地理書における地名音訳漢字表記—『輿地誌略』を資料として—」『国文鶴見』 34
- 深澤 愛 (2003a) 「漢字平仮名交じり文中における表記の選択—博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記—」『日本語科学』 14
- (2003b) 「漢字仮名交じり文中における片仮名表記の選択—博文館『太陽』前誌群を資料として—」『待兼山論叢 (文学篇)』 37
- 水持邦雄 (1990) 「明治初期における外国地名の漢字表記について」『金沢大学語学・文学研究』 19
- 《新聞に関する文献》
- 西田長寿 (1961) 『明治時代の新聞と雑誌』至文堂
- 明治ニュース事典編纂委員会編 (1983-86) 『明治ニュース事典 I ~ VIII』毎日コミュニケーションズ
- 明治文化研究会編 (1967-74) 『明治文化全集 別巻 明治事物起原』日本評論社
<ホームページ> 朝日新聞社「朝日新聞社のあゆみ」
<http://www.asahi.com/shimbun/honsya/j/history.html/>
- 《辞書》
- 秦延通編 (1985) 『最新日中外来語辞典』東方書店
- 杉本達夫他編 (2005) 『デイリーコンサイズ中日・日中辞典 第2版』三省堂
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2000-02) 『日本国語大辞典 第2版』小学館
<電子辞書> 『漢字源』学習研究社, 『広辞苑 第5版』岩波書店, 『ジーニアス英和辞典 第3版』大修館書店, 『プログレッシブ和英中辞典 第3版』小学館

【調査対象文献】

宛字外来語辞典編集委員会編（1979）『宛字外来語辞典』柏書房

漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処編（1986-94）『漢語大詞典』上海辞書出版社

日本国語大辞典第二版編集委員会編（2000-02）『日本国語大辞典 第2版』小学館

羅布存徳／井上哲次郎訂増（1883）『英華字典 増訂版』藤本次右衛門（千葉大学附属図書館蔵本）

<復刻版>「横濱毎日新聞」不二出版,「朝野新聞」ペリかん社,「萬朝報」日本図書センター,
『文部省調査外国地名字彙』大空社,『標準漢譯外國人名地名表』汲古書院

<マイクロフィルム>「東京朝日新聞」朝日新聞社・日本マイクロ写真

<デジタル画像>『最近漢文万国地図』国立国会図書館近代デジタルライブラリー,『掌中漢訳万国地図』国立国会図書館近代デジタルライブラリー

（やまもと・あやか 千葉大学文学部日本文化学科2009年卒業）

付表【外国地名漢字表記変遷一覧】

※採集した地名表記のうち、表記に揺れや交替が見られたものだけ表にまとめた。なお、一字

	新聞	1875	数	新聞	1880	数	新聞	1885	数	新聞	1890	数	新聞	1895
アイルランド				毎	愛耳蘭	2				毎	愛耳蘭	1		
				朝	愛蘭	1	毎	愛蘭	2	朝	愛蘭	3		
							朝	愛爾蘭土	1					
アジア	毎	亞西亞	1				毎	亞西亞	2	毎	亞西亞	1		
	朝	亞細亞	3	毎朝	亞細亞	2	毎朝	亞細亞	10	毎	亞細亞	1	毎東	亞細亞
アフガニスタン				毎朝	亞加業坦	7								
アフリカ	朝	亞弗利加	1	朝	亞弗利加	1				毎朝	亞弗利加	7	毎東	亞弗利加
				毎	亞非利加	2	毎	亞非利加	1				毎萬東	亞非利加
アメリカ	毎	亞米利加	1	毎	亞米利加	2	毎	亞米利加	3	毎朝	亞米利加	4	萬東	亞米利加
	毎	米利堅	1	朝	米利堅	1								
アラビア										毎	亞刺比亞	1		
アルゼンチン							毎	亞然的音	1					
イギリス	朝	英吉利	2				毎朝	英吉利	2					
イタリア	朝	伊太利	1	毎朝	伊太利	3	毎朝	伊太利	3	毎朝東	伊太利	10	毎萬東	伊太利
	朝	伊太利亞	1											
	朝	伊太里	1											
	朝	以太里	1											
	毎	以太利	1				毎	以太利	2				毎	以太利
							毎	意大利	1	毎朝	意大利	5		
										毎	伊多利	1		
イングランド							毎	英倫	1	毎	英倫	1		
ウィーン	朝	維納	1							朝	維納	1	東	維納
							毎	維也納	1	毎	維也納	1		
ウェールズ							毎	威士	1					
ウラジオストック							朝	海參崴	1					
													萬	浦鹽斯德
													東	浦潮
オーストリア	毎朝	澳地利	2				毎	澳地利	1	東	澳地利	1	毎	澳地利

表記や“～國”といった略称表記は割愛した。数字は当該表記が登場した記事数。

数	新聞	1900	数	新聞	1905	数	新聞	1910	数	新聞	1915	数	新聞	1920	数	新聞	1925	数	
	萬	愛耳蘭	1	每	愛爾蘭	1	萬	愛爾蘭	1										
	萬東	愛蘭	5				萬東	愛蘭	7	萬東	愛蘭	6	萬東	愛蘭	20				
							萬	愛蘭土	1										
				萬	亞西亞	1													
3	萬東	亞細亞	3	每萬東	亞細亞	14	萬東	亞細亞	5	東	亞細亞	1	萬東	亞細亞	26	東	亞細亞	3	
	東	亞富汗	3				東	亞富汗	1										
	每萬東	阿富汗	4										東	阿富汗	5				
	東	阿富汗斯坦	1										萬	阿富汗斯坦	1				
2	東	亞弗利加	1	每東	亞弗利加	4	萬東	亞弗利加	2	萬	亞弗利加	1	東	亞弗利加	1	東	亞弗利加	1	
3	萬東	亞非利加	4	東	亞非利加	1													
	每萬東	阿弗利加	7				萬	阿弗利加	1	萬東	阿弗利加	5	萬東	阿弗利加	15	東	阿弗利加	1	
	東	阿非利加	1							萬東	阿非利加	5	萬	阿非利加	1				
6	每萬東	亞米利加	25	東	亞米利加	2	萬東	亞米利加	7	萬東	亞米利加	5	萬東	亞米利加	22	東	亞米利加	3	
	每東	米利堅	4	每東	米利堅	6	東	米利堅	2										
	萬	亞刺比亞	1				萬東	亞刺比亞	2				東	亞刺比亞	1				
										萬	亞拉比亞	1	東	亞拉比亞	1				
				萬	亞爾然丁	1	東	亞爾然丁	3	萬東	亞爾然丁	3							
													東	亞然丁	3				
	每萬東	英吉利	6				東	英吉利	1	萬東	英吉利	5	東	英吉利	2	東	英吉利	6	
																東	伊吉利	1	
8	每萬東	伊太利	11	每萬東	伊太利	6	萬東	伊太利	18	萬東	伊太利	30	萬東	伊太利	42	東	伊太利	24	
				每	伊太利亞	1													
1				每	以太利亞	2													
	東	英蘭	1				萬東	英蘭	8	萬東	英蘭	8	東	英蘭	1	東	英蘭	2	
1	萬	維納	1				萬	維納	1				萬	維納	3				
	萬東	維也納 (納也1)	3	萬東	維也納	2	萬東	維也納	7	萬東	維也納	5	東	維也納	7				
										萬	威斯	1							
				東	浦潮斯德	1							東	浦潮斯德	1				
1	每東	浦鹽斯德	3	每萬	浦鹽斯德	7	萬東	浦鹽斯德	2				萬	浦鹽斯德	1				
				萬	浦鹽斯特	1													
1				東	浦潮	8	東	浦潮	2	萬東	浦潮	34	東	浦潮	11				
	東	浦鹽	2	每萬	浦鹽	13	萬東	浦鹽	21				萬	浦鹽	8	東	浦鹽	9	
1																			

	每	澳地利	1				每	澳太利	1					
	朝	塊地利	1				每	塊地利	3	每	塊地利	1		
							朝	塊太利	1			東	塊太利	
										朝	塊斯地利	1		
	新聞	1875	数	新聞	1880	数	新聞	1885	数	新聞	1890	数	新聞	1895
オランダ	每	荷蘭陀	3				每	阿蘭	1					
	每朝	荷蘭	3							每	荷蘭	5		
	每朝	和蘭	2	每	和蘭	1	每	和蘭	3	朝東	和蘭	2	東	和蘭
カナダ							每	加奈太	1	每朝	加奈太	3	每東	加奈太
										朝	加奈陀	10	每東	加奈陀
													每	加奈多
													東	加拿陀
													每	加拿多
グレートブリテン	每	大貌烈頑	1				每	大不烈頑	1					
コロンビア							每	哥倫比亞	1				東	哥倫比亞
コンスタンチノーブル	朝	君士旦丁諾波爾	1											
サイゴン							每	西貢	1				每	西貢
サハリン	朝	嵯峨連	1											
サンクトペテルブルク				每	聖彼得堡	5	每	聖彼得堡	2	每朝	聖彼得堡	3		
													每東	聖彼得堡
	朝	伯得堡	1											
シカゴ													每	斯加古
シベリア	朝	止邊里亞	1				朝	西比利亞	1				東	西比利亞
													萬東	西比利亞
										每	西比利	2		
													東	西伯利
										朝	西伯亞	1	萬	西伯里
ジャワ							每	瓜哇	1					
スイス				每	瑞西	1	每	瑞西	3	每朝東	瑞西	5	每萬	瑞西
				每	瑞士	1								
スウェーデン	朝	瑞典	2				每	瑞典	4	每	瑞典	2		
	每	瑞丁	1											
スエズ														
スコットランド				朝	蘇格蘭	1	每	蘇格蘭	1					
										朝	蘇忽蘭	1		
スペイン	每朝	西班牙	7	每朝	西班牙	3	每朝	西班牙	7	每朝東	西班牙	5	東	西班牙

			萬東	奧地利	2	東	奧地利	2	東	奧地利	8	萬東	奧地利	11	東	奧地利	2		
1	萬	奧地利	1				萬東	奧地利	3	萬	奧地利	1							
數	新聞	1900	數	新聞	1905	數	新聞	1910	數	新聞	1915	數	新聞	1920	數	新聞	1925	數	
	每	荷蘭	2																
1	每萬	和蘭	9	每萬	和蘭	12	萬	和蘭	2	萬東	和蘭	11	萬東	和蘭	7	東	和蘭	2	
2	每萬	加奈太	17							萬	加奈太	2	萬	加奈太	1				
5	每萬	加奈陀	10	每東	加奈陀	22	東	加奈陀	3	萬東	加奈陀	15	萬東	加奈陀	12	東	加奈陀	5	
1																			
1																			
1	東	加拿太	1																
	萬	大貌列顛	1	萬東	大不列顛	2													
1	每	古倫比亞	1																
	每	君士坦丁堡	1	東	君斯丹丁堡	2							東	君斯丹丁堡	3				
1	東	西貢	3	每	西貢	2				萬	西貢	1	萬東	西貢	7				
	萬	柴棍	2	萬	柴棍	3				東	柴棍	1							
				每	薩哈噠	1													
	萬東	聖彼得堡	3	每萬	聖彼得堡	19													
6				萬	聖彼得堡	3													
	東	聖彼土耳其堡	1										東	聖彼波斯波	1				
				東	彼得堡	2	東	彼得堡	2										
1							萬	市俄古	2	萬	市俄古	2	萬	市俄古	4				
				每東	市俄高	2	東	市俄高	1	東	市俄高	1	東	市俄高	8				
2	萬東	西比利亞	3	每	西比利亞	3	萬	西比利亞	3	萬東	西比利亞	3	萬東	西比利亞	3				
4	萬東	西伯利亞	2	每萬	西伯利亞	14	東	西伯利亞	6	東	西伯利亞	3				東	西伯利亞	1	
				每萬	西比利	3				東	西比利	1	萬	西比利	44				
1				東	西伯利	1							東	西伯利	64	東	西伯利	8	
1													萬	西比亞	1				
													萬東	瓜哇	3	東	瓜哇	1	
																東	瓜哇	1	
6	每萬	瑞西	5	萬東	瑞西	8	萬東	瑞西	6	萬東	瑞西	8	萬東	瑞西	12	東	瑞西	5	
	每萬	瑞典	3	每萬	瑞典	5	萬東	瑞典	6	萬東	瑞典	11	萬東	瑞典	11	東	瑞典	4	
	每萬	蘇士	9	萬東	蘇士	5				東	蘇士	1	萬東	蘇士	14	東	蘇士	1	
							萬	蘇西	1										
	東	蘇格蘭	1				萬東	蘇格蘭	3	萬東	蘇格蘭	3							
1	每萬	西班牙	5				萬東	西班牙	4	萬東	西班牙	2	萬東	西班牙	8	東	西班牙	3	

			每	西班	1				朝	西班	3			
	每	士班	1											
セルビア						每	塞爾維	1						
											每	塞耳維		
チリ			每朝	智利	5	每	智利	1						
			每	知利	2	每	智理	1						
	新聞	1875	数	新聞	1880	数	新聞	1885	数	新聞	1890	数	新聞	1895
デンマーク	朝	丁抹	2			每	丁抹	3	每	丁抹	2	每	丁抹	
	每	噠馬	1											
ドイツ			每朝	獨逸	5	每朝	獨逸	28	每朝東	獨逸	43	每萬東	獨逸	
			朝	獨乙	2	每朝	獨乙	9	每朝	獨乙	4	每萬東	獨乙	
トルキスタン												東	土耳其斯坦	
トルコ	朝	土耳其	2	朝	土耳其	1	每	土耳其	4	每朝	土耳其	4	東	土耳其
									每	土爾其	1	萬東	土耳其古	
ニューヨーク	朝	紐育	3	每朝	紐育	6	每朝	紐育	6	每朝東	紐育	19	每萬東	紐育
			朝	新紐克	1				朝	紐約克	1	萬	新育	
ノルウェー	朝	諾耳回	2			每	諾威	1	每	諾威	1			
						每	那威	1						
パリ	朝	巴里	4	每朝	巴里	5	每朝	巴里	12	每朝東	巴里	26	每萬東	巴里
	朝	巴里斯	1						朝	巴理	6			
バルチック														
ハンガリー						每	洪曷利	1						
												東	洪喝利	
									每	匈牙利	1			
									朝	匈瓦利	1			
												萬	匈牙利	
ヒマラヤ														
フィリピン														
ブラジル						每	伯西兒	1						
												東	伯拉西爾	
フランス	朝	佛蘭西	5			每朝	佛蘭西	7	每朝東	佛蘭西	10	每萬東	佛蘭西	
	每	佛朗西	1											
ブルガリア									每	伯爾加里	1			
プロシャ	每	普魯西	1			每	普魯西	1				每	普魯西	
	每	普魯士	1											
ペルー	每	白露	1	每朝	白露	7	每	白露	1					
			每	伯露	2							每	秘露	

	每	西班	1																
										萬	塞爾維	2	萬	塞爾維	2				
1										東	塞耳比	4	萬	塞耳比	1				
										東	塞爾比	2	東	塞爾比	4				
	每萬	智利	5	萬	智利	1	萬東	智利	2	萬東	智利	7	萬東	智利	3	東	智利	10	
数	新聞	1900	数	新聞	1905	数	新聞	1910	数	新聞	1915	数	新聞	1920	数	新聞	1925	数	
1	每萬	丁抹	3	萬	丁抹	1	萬	丁抹	3	萬東	丁抹	3	萬東	丁抹	6	東	丁抹	2	
39	每萬東	獨逸	60	每萬東	獨逸	74	萬東	獨逸	78	萬東	獨逸	187	萬東	獨逸	152	東	獨逸	42	
5	每	獨乙	3	每萬東	獨乙	8	東	獨乙	1	東	獨乙	1				東	獨乙	1	
1				東	土耳其	1													
1	東	土耳其	1	每東	土耳其	2	萬東	土耳其	8	東	土耳其	20	萬東	土耳其	18	東	土耳其	1	
4	每萬	土耳其	2	每萬東	土耳其	6	萬	土耳其	2	萬	土耳其	6	萬	土耳其	8				
33	每萬東	紐育	36	每萬東	紐育	49	萬東	紐育	45	萬東	紐育	74	萬東	紐育	94	東	紐育	28	
1																			
	萬東	諾威	5				萬	諾威	2	萬東	諾威	6	萬東	諾威	5	東	諾威	2	
25	每萬東	巴里	36	每萬東	巴里	22	萬東	巴里	19	萬東	巴里	53	萬東	巴里	181	東	巴里	27	
				每萬東	波羅的	42				東	波羅的	1	萬東	波羅的	5				
				萬	波苦痲苦	1													
										東	洪牙利	5	東	洪牙利	4	東	洪牙利	1	
1																			
	每	匈牙利	1	萬東	匈牙利	4	萬東	匈牙利	3	萬	匈牙利	6	萬	匈牙利	6				
1	萬東	匈牙利	2																
	東	比馬來	1													東	雪峰	1	
	萬	菲律賓	4				東	菲律賓	1	東	菲律賓	1							
	萬東	比律賓	4	每東	比律賓	2	萬東	比律賓	4	東	比律賓	2	萬東	比律賓	4				
							萬	菲律賓	1	萬	菲律賓	4							
													東	伯刺西	1				
1							萬	伯刺西爾	1	萬	伯刺西爾	1	萬	伯刺西爾	2				
8	每萬東	佛蘭西	6	每萬	佛蘭西	2	萬東	佛蘭西	6	萬東	佛蘭西	19	萬東	佛蘭西	17	東	佛蘭西	22	
										萬東	勃牙利	4	萬東	勃牙利	8				
1	萬	普魯西	1	每	普魯西	1	東	普魯西	2	東	普魯西	5	萬東	普魯西	2	東	普魯西	1	
				萬	普漏西	1				萬	普魯西亞	1							
1							東	秘露	2	萬東	秘露	2				東	秘露	10	

ベルギー	每朝	白耳義	4				每朝	白耳義	3	每朝東	白耳義	8	每東	白耳義	
	朝	比耳時	1												
ベルシャ				每	波斯	1	每	波斯	1						
				每	百兒社	1									
ベルリン	朝	伯靈	1	每朝	伯林	2	每	伯林	6	每朝	伯林	11	萬東	伯林	
ポーランド							每	波蘭	1						
ポルトガル	朝	葡萄牙	2							每朝東	葡萄牙	22			
		新聞	1875	数	新聞	1880	数	新聞	1885	数	新聞	1890	数	新聞	1895
マニラ															
マルセイユ										每朝	馬耳塞	2	萬	馬耳塞	
メキシコ							朝	墨西哥	1				每	墨西哥	
							每	墨是可	1				東	墨斯古	
モスクワ				每	莫斯科	2									
							每	莫斯古	1						
ルーマニア							每	羅馬尼亞	1						
ルクセンブルク							每	歴山堡	1						
ロシア	每朝	魯西亞	4	每	魯西亞	1	每	魯西亞	1						
	每朝	魯士亞	2										每	魯士亞	
							每朝	露西亞	2	每朝	露西亞	7	每萬	露西亞	
ロンドン	朝	倫敦	5	每朝	倫敦	15	每朝	倫敦	20	每朝東	倫敦	63	每萬東	倫敦	
	朝	倫頓	1	朝	倫頓	1	每	倫動	4						
	每	龍動	3	朝	龍動	3	每	龍動	2						
ワシントン	每朝	華盛頓	2				每	華盛頓	1	朝	華盛頓	3	每東	華盛頓	
												萬	和聖東		

2	每萬東	白耳義	11	每萬東	白耳義	12	萬東	白耳義	4	萬東	白耳義	26	萬東	白耳義	14	東	白耳義	10
	每	比耳義	2	每萬	伯耳義	2												
				東	白耳	1				萬	白耳	1						
	萬	波斯	1	萬	波斯	1	萬東	波斯	6	萬東	波斯	4	萬東	波斯	13			
3	每萬東	伯林	13	每萬東	伯林	42	萬東	伯林	52	萬東	伯林	15	萬東	伯林	25	東	伯林	10
	每	波蘭	1	每東	波蘭	5				萬東	波蘭	21	萬東	波蘭	23	東	波蘭	4
				每	波蘭士	1												
							萬東	葡萄牙	3	萬東	葡萄牙	3	萬東	葡萄牙	2	東	葡萄牙	1
	萬	葡萄	1															
数	新聞	1900	数	新聞	1905	数	新聞	1910	数	新聞	1915	数	新聞	1920	数	新聞	1925	数
	每	馬尼刺	6	每萬東	馬尼刺	3				萬	馬尼刺	1	萬	馬尼刺	1			
	東	真菲	1							東	麻尼刺	1						
							東	麻尼拉	3	東	麻尼拉	3	東	麻尼拉	2			
1	每東	馬耳塞(墨1)	18				東	馬耳塞	10	萬東	馬耳塞	19	萬東	馬耳塞	16			
													萬	馬塞	1			
1							東	墨西哥	1	萬東	墨西哥	6	萬東	墨西哥	7	東	墨西哥	1
1																		
	東	莫斯科	1	每萬東	莫斯科	9	東	莫斯科	3	萬東	莫斯科	3	萬東	莫斯科	6	東	莫斯科	2
				每萬	莫斯科	2												
										萬東	羅馬尼	11	萬東	羅馬尼	6	東	羅馬尼	1
													萬	廬森堡	1			
							東	魯西亞	1									
1																		
2	每萬東	露西亞	8	每萬東	露西亞	26	萬東	露西亞	11	萬東	露西亞	11	萬東	露西亞	19	東	露西亞	4
														(露西亞1)				
68	每萬東	倫敦	115	每萬東	倫敦	90	萬東	倫敦	96	萬東	倫敦	121	萬東	倫敦	178	東	倫敦	21
	每萬東	龍動	20	每	龍動	2												
6	萬東	華盛頓	4	每萬東	華盛頓	3	萬東	華盛頓	13	萬東	華盛頓	24	萬東	華盛頓	103	東	華盛頓	13
1										東	華府	1	萬東	華府	6	東	華府	3